失われたピップ—『大いなる遺産』序論

松 田 英 男

Charles Dickens にとって二度目の自伝的作品である *Great Expectations* (1861) は今日、いわゆる教養小説 (Bildungsroman) に属するものとして論じられることが多い。この分野の研究の先駆者 J. H. Buckley の定義に従えば、ビルドゥングスロマンの典型的な筋書きは、一定の感受性を備えた主人公が現実の生活の様々な経験を通して精神的成長を遂げ、ある種の成熟を達成するというものである。¹⁾ このような教養小説としての解釈は、Pip の夢を「卑しい俗物根性」に基づくものとし精神的墮落からの再生の過程を辿るバックレー本人のもの²⁾ から、ピップの夢を村の生活には求められない「想像力の生活」に対する無理からぬ願望の反映と捉える Q. D. Leavis のもの³⁾ に至るまで、様々である。とは言っても、教養小説としての『大いなる遺産』解釈を決定的に特徴付ける態度が存在する。それは、この作品を成長した主人公ピップが自らの過去の経験を正しく展望した物語と理解したり、⁴⁾ 或るいは、圧迫的な幻想や恐怖から解放された精神的自由への前進の物語とみなす読み⁵⁾ のうちに端的に見られる、「成長した」語り手ピップの道徳的権威、紳士になる夢の虜となってゆく若いピップとの関係におけるその位置の安定性に対する信頼である。

語り手ピップの信頼性という問題を別にすれば、確かに、この教養小説としての解釈には一定の真理が含まれていることは明白である。無知で偏狭な村の生活を送っていた少年が紳士階級という未知の世界に憧れ、大都会ロンドンで実際に紳士としての生活を経験するものの、その生活の空虚と後にした村の生活に秘められた価値を再認識して、堅実な社会生活に入るといふ物語の枠組みの中には、どのような意味を読み込むにせよ、主人公のある種の成長があることは否定出来ない。しかし、だからと言って、大人になったピップの語りの信頼性——若い頃の自己の物語に対する解釈者としてのその正当性を巡る疑念が消える訳ではない。教養小説としての解釈の中でも若いピップの俗物性を強調する素朴な型のものになればなるほど際立って来るのが、大人になった現在の語り手が過去の自己に対して加える批判を無条件

に採用する傾向であるが、それは、ピップの物語に対する道德寓話としての図式的理解に直接結び付いている。

過去の自己のあるがままの姿の回復、再現はもとより不可能と決まっているが、そもそも語り手ピップ自身そのことを意図しているとは考えられぬ。彼が若いピップの物語を教訓化しようとし、存在の不安や自己形成の必要といった存在論的視野から安直な道德的視野へとしばしば陥る傾向は、既に指摘されている通りである。⁶⁾ 現在の自己との連続性の確認を求め、書く対象としての過去の自己と書く主体としての現在の自己との統合を求める語り手の姿勢をそこに見ることは可能ではある。しかし、過去の夢の意味を否定し、それからの覚醒を強調する語りには、倫理的基準として Joe を受け入れ、ともかくも中産階級の一員として勤儉力行している語り手ピップの自己正当化、現在の自己の時間を超えた安定を確保しようとする企図が見えるのではないだろうか。そしてそれは、村を後にした若いピップがジョーや囚人との関わりを忘却しようとしたのと同じ意味において過去の否定であり、歪曲につながってはいないか。海老根宏氏の指摘する通り『大いなる遺産』は非合理的力の充ちている作品であり、⁷⁾ 若いピップの物語には、語り手ピップの加える成長という枠組みには収まらない存在の不安や混乱と呼ぶべきものが感じられるのである。本論では、若いピップの物語を語り手ピップとの関係において分析し、語りとしてのテキストが内包している矛盾とその意味を考察してゆきたい。

I

日暮れ近いクリスマス・イヴの午後、荒れ果てた教会墓地で、初めて自分という存在を意識するピップ——作品冒頭近いこの場面の中に、既に、幼いピップの内面世界が集約されている。

My first most vivid and broad impression of the identity of things, seems to me to have been gained on a memorable raw afternoon towards evening. At such a time I found out for certain, that this bleak place overgrown with nettles was the churchyard; and that Philip Pirrip, late of this parish, and also Georgiana wife of the above, were dead and buried; and that Alexander, Bartholomew, Abraham, Tobias, and Roger, infant children of the aforesaid,

were also dead and buried; and that the dark flat wilderness beyond the churchyard, intersected with dykes and mounds and gates, with scattered cattle feeding on it, was the marshes; and that the low leaden line beyond, was the river; and that the distant savage lair from which the wind was rushing, was the sea; and that the small bundle of shivers growing afraid of it all and beginning to cry, was Pip. (第1章)⁸⁾

ピップにとっては、自意識の誕生が、即、自分が置かれた立場の不安定、存在の危機の認識につながっていることに注目しておこう。翌日のクリスマス宴会の場面に見る通り、村での生活は、少年ピップにとって、大人の自己満足のために人間以下のものとして虐待される、極めて居心地の悪いものであった。幼いピップの罪悪感 (sense of guilt) が、子供を厄介者として扱いは、感謝と服従を強要する粗暴な田舎の生活そのものに起因する所が多いことは、歴史的背景による説明をまたなくとも明らかである。

彼の自意識の発生は、この直後の得体の知れない恐ろしい男 (脱獄囚 Magwitch) の出現によって定位されることになるのだから、既に、自己に対する他者の脅威の認識を内包していることになる。他者の脅威によって脳裏に刻み込まれた自己の姿とは、粗暴な姉以外全ての縁者に先立たれ、茫漠と広がるほの暗い宇宙で一人震えている無力な少年であった。回想の冒頭で示されるこの鮮烈な自画像は、語り手の側における不安な存在としての自己認識の抜き難さを示すものである。

ピップのこの危うい自己にとって唯一の逃げ場がジョーであった。Satis House 訪問を通して紳士階級の世界の存在を知らされる以前においては、ピップは、ジョーの鍛冶場を「一人前になり、独立するための輝かしい大鍛道」(第14章) と信じ、姉の夫として自分を引き取ってくれたこの善良な鍛冶屋に弟子入りする日を心待ちにしていた。頭の弱さもあって、周囲の大人による虐待からの防壁とはなり得ないものの、彼は、ともかく陰ながらピップを慰めてくれる唯一の他者であったからである。

情愛の深さ、勤勉さ、そして義務に対する忠実というその性格ゆえに、ジョーは「狭隘な村の世界の肯定的側面を代表」⁹⁾ しているとも見られ、その結果、ピップが結末において帰るべき規範であると考えられることも多い。¹⁰⁾ しかし、知力以外の点においても、ジョーの限界は余りにも明らかである。村の世界に溶け込み、一家を構える鍛冶屋としての役割に満足し切ったこの

友人は、まさにその限界によって、ピップの直面する精神的危機の内容を照射する。

囚人に命じられて食料とやすりを家から持ち出したことで、ピップは「盗み」を犯したという罪悪感に囚われることになる訳だが、この「盗み」という行為自体は、クリスマスの宴会におけるそのどたばた式の決着からも知られる通り、たいして内容はない。それが最終的に少年の罪悪感につながるのは、唯一の友人ジョーには話せない秘密の最初の発生であるからであり、より本質的には、彼が持ち前の感受性ゆえに囚人に対する同情を覚え、従うべき道徳的規範についての混乱を来すからである。「沼地にいる私の知り合いの脱獄者は、御馳走の何と素敵ない味付けソースになっていることだろう」(第5章)と醒めた目で周囲の大人たちを観察し、ジョーと共に囚人搜索の失敗を祈るピップは、既成の道徳からの逸脱を始めている。¹¹⁾ 国王の名のもとに囚人狩りを続行する兵士に対して、ピップの姉や村人達は何のためらいもなく喜々として協力してゆく。囚人に対して人間としての同情を表明しつつも、ジョーは、その大人としての自己の不在ゆえに世間的権威との対立の意識から自由なのに対し、少年は、大人の世界の道徳からの孤立を意識せざるを得ない。「盗み」についての真相をジョーに告白しなかった理由を巡って、語り手は、あれこれ分析した後、次のように結論付けている。そこには、このような周囲の世界と自己との対立、そこから生じる善悪を巡る混乱という少年ピップの心に兆し始めた暗い影に対して、世間的常識による判断を下して片付けようとする語り手ピップの姿勢が既に見えているのではないか。

In a word, I was too cowardly to do what I knew to be right, as I had been too cowardly to avoid doing what I knew to be wrong. I had had no intercourse with the world at that time, and I imitated none of its many inhabitants who act in this manner. Quite an untaught genius, I made the discovery of the line of action for myself. (第6章)

同様のことが、ジョーから身の上話を聞かされた時のピップの反応についても認められる。「かわいそうな子供」であった自分を引き取ってくれたいきさつを知らされて、ピップが感謝の気持に満たされ泣いてすがり、ジョーの言葉で言えば「一番の仲良し」として絆を確認する場面は、ピップの不安な自意識が父なる保護者ジョーによって包容される至福の場面であり、この

II

Miss Havisham の遊び相手としてサチス邸に呼ばれたピップは、誇り高い美少女 Estella から「卑しい労働者の小僧」とあからさまな侮蔑を浴び、深刻な動揺を来す。未知の基準によって自分という存在を容赦なく否定されたピップの心の痛みには、村の大人達の不正に対する感情とは次元の違う切実さがある。

I was so humiliated, hurt, spurned, offended, angry, sorry—
I cannot hit upon the right name for the smart—God knows what
its name was—that tears started to my eyes.
...As I cried, I kicked the wall, and took a hard twist at my hair;
so bitter were my feelings, and so sharp was the smart without
a name, that needed counteraction. (第8章)

この直後に語り手は、少年であった自分がエステラの嘲笑に為すすべもなく深く傷付けられた原因として、姉の非道な仕打ちにさらされ、その不当さ (injustice) に一人思い悩んで来たために当時の自分が「道徳的に臆病で感じやすい人間になっていたという事実」を挙げている。海老根氏の見ると、ピップのこのような性質の底にあるものが「アイデンティティの不安定、存在の不安」¹³⁾ であり、彼を襲う「名状し難い痛み」がアイデンティティの危機の兆候であることは明らかである。エステラの出現は、不安を抱えつつ辛うじて成立していた村の鍛冶屋の子としてのピップの自己を崩壊させ、ジョーの跡を継ぐという徒弟としての生活からの自己疎外を決定的にしたのである。¹⁴⁾

エステラをその象徴とするサチス邸体験が少年ピップに及ぼす影響を巡っては、単に「誤った自尊心、誤った希望、自らの生まれに対する悲しむべき軽蔑」を生じさせたものであるとか、¹⁵⁾ 或るいは、「中産階級社会の誤った社会的価値基準」¹⁶⁾ を受け入れるという結果を招いたものであるといった、典型的な教養小説的解釈が一方の極にある。これと反対の位置を占めるのが、リーヴィスや J. Hillis Miller の解釈である。リーヴィスによれば、サチス邸体験とは、村や沼地の粗暴で単調な世界とは全く違った新しい世界の発見であり、「想像力の生活——パンプルチュックの世界の下劣な利己主義やジョーの気の良い無知とは違った感情」¹⁷⁾ の存在を知らされたことであ

るという。この見方は、ピップはエステラを通して「何か特定のものの欠如として自己を定義」するのに成功し、「望ましい未来の自己の姿を定義」することで人生の意味を見出だしたのだとするミラーの主張¹⁸⁾とも基本的に共通するものと言えよう。新しい生活の内容という問題を別とすれば、少年ピップの反応についての読みとしてこの主張の妥当性は疑う余地が無いと筆者には思える。ここで我々が目にしているのは、自己の世界の低俗さ、自分自身の無知、不足を痛感させられ、しかも、そこからの脱出の不可能を意識している少年の絶望的な反応なのである。

確かに、「道徳的に臆病で感じやすい人間になっていた」という語り手のいささか弁解じみた口調の裏には、俗物化の契機という、後に本格化する社会的、教養小説的視点による位置付けの意図が感じられなくもない。それに、サチス邸内部の描写に示される死と腐朽の雰囲気など、新しい世界そのものの価値は疑わしく描かれている。しかし、一息ついたピップの見たもの——神出鬼没で、樽の上を歩き回ったり、ついには「まるで空中へ抜け出て行くかのように、はるか頭上の回廊から出て行く」エステラの姿や、更には、梁に首を括ってぶら下がっているミス・ハヴィッシュムの幻覚など——のうちには、サチス邸体験が村の少年の感受性に与えた衝撃の深刻さ、そして、同時に、暗い死の影を秘めたものではあるが、未知の可能性のイメージが窺える。そこでは、「望ましい未来の自己の姿」が取るべき明確な形は認識されてはいないものの、ともかく、現在の自己を超えるための模索、可能性の探求が始まっており、村の少年の混乱した不安な意識に初めてある種の求心性を付与している。このような探求自体がピップに生の意味の発見をもたらすのである。紳士の世界が道徳的に空虚であるか否かという社会リアリズム的な問題とは関係なく、その新しい世界に向けた想像力の経験、生きるための個人的 fiction 創造という自己探求の軌跡としてのピップの物語の理解は、作品全体の解釈に不可欠なものである。このサチス邸やロンドンにおけるピップの下宿 Barnard's Inn が荒廃、腐朽の comic-grotesque な描写を通して精神的死の象徴として位置付けられていながら、語り手ピップを通してこの死の世界を描くディケンズが、彼独特の想像力を発揮する場としてその描写を明らかに楽しんでいることも、若いピップの想像力の経験に対する間接的な、意図しない弁護となっていると思われる。

紳士の世界の存在を知ったものの、村に生きるしかないピップの孤立感、挫折感を客観的に裏付けるのが、作り話の一件である。ピップは帰宅する

や、好奇心の塊と化した姉やパンプルチュックからの質問責めに遭い、作り話でその場をしのぐ。しかし、唯一の友人であるジョーに対しては、嘘を告白し、心の葛藤を打ち明ける。

And then I told Joe that I felt very miserable, and that I hadn't been able to explain myself to Mrs Joe and Pumblechook who were so rude to me, and that there had been a beautiful young lady at Miss Havisham's who was dreadfully proud, and that she had said I was common, and that I knew I was common, and that I wished I was not common, and that the lies had come of it somehow, though I didn't know how. (第9章)

ミス・ハヴィッシュムやエステラのありのままの姿を俗悪な姉の前に引きずり出して見せることに「何か粗野で裏切りのようなもの」があると感じ、作り話を選んだピップの行動は賢明であるし、それは、彼の道徳的感受性の表れとも言える。¹⁹⁾ 嘘はこの場合、道徳的な面での卑しさを避けるための手段なのである。それは同時に、自己の親密な想像力の世界を守ろうとする、少年の個としての自覚の表れともなっている。

この告白に対して、ピップの友人は、単に「嘘は嘘」とか、庶民は庶民同士で付き合った方が良くとか、通俗道徳を説くばかりで、「ピップの行為の背景にある動機の複雑さ」²⁰⁾を理解出来ないその無力を露呈している。形而上学的問題に対して「常識的決まり文句でしか答えられない」²¹⁾ジョーであるが、ピップと平凡 (common) だが誠実な少女 Bidley とのその後の会話 (第17章) にも端的に表れている通り、語り手がジョーやビディの夢や想像力とは無縁の「平安と自足の生活」²²⁾のうちに、若いピップの従うべき道徳的規範を見ていることは明らかである。フランクの指摘する通り、鍛冶屋の生活に満足すべきという二人の忠告は、「形而上学的問題を常識の問題に変質」させて、「ピップの置かれた状況の複雑さ」を覆い隠すものであるが、²³⁾語り手ピップも過去の自己の葛藤の単純化という誘惑に心惹かれていることは明らかである。この出来事は、ピップの抱える葛藤を村の世界との関係において位置付けると共に、若いピップの物語に対する語り手ピップの教訓化の姿勢を露呈するものと言えよう。

ミス・ハヴィッシュムからの謝礼金でジョーに弟子入りさせられ、恩人顔のパンプルチュックや得意顔の姉という俗悪な世界に奉公人として「縛りつけ

られた」(第13章) ピップが惨めな気持になるのは当然である。村の世界に取り残された当時の心境を回想する第14章は、自分の家を恥じる気持の惨めさ、「人生のあらゆる興味やロマンスの終焉」という絶望感など、ピップの過去の瞬間を直接的に伝えるものとなっている。鍛冶場で働いている姿をエステラに見られたらという恐怖と幻想など、そこにはサチス邸体験による若い日の自己の変化の不可避性が、単純化、教訓化という誘惑を超えて捕らえられている。

How much of my ungracious condition of mind may have been my own fault, how much Miss Havisham's, how much my sister's, is now of no moment to me or to any one. The change was made in me; the thing was done. Well or ill done, excusably or inexcusably, it was done. (第14章)

村の世界でこのように孤立し、アイデンティティの危機に陥っているピップが、「大いなる遺産相続の見込み」を知らされて直ちに匿名の恩人が自らの夢の対象であるエステラの養母ミス・ハヴィッシュムだと誤解する(第18章)のは必然と言えよう。徒弟の生活からの自己疎外に直面する彼は、サチス邸の後継者としての屋敷の再建、姫君エステラとの結婚という周囲の人間も誤解している通りのいかにも本当らしい「ロマンスの若き騎士」(第29章)としての自己の役割、新たな自己を進んで引き受けるのである。

遺産相続の話がもたらされる以前から、ピップは、自分がミス・ハヴィッシュムの男性に対する復讐の最初の対象にされていることは自覚していた(第12章他参照)。ロンドンで紳士としての勉強を開始したピップのサチス邸訪問とエステラとの再会(第29章)は、このような暗黒面をも含めて、ピップにとつてのエステラの意味を確認するものとなっている。その章の終わりで語り手は、ジョーに対する忘恩に思い及ばず、エステラに対する感情を「崇高で大いなる感情」だと思っていた過去の自分を悔やんで見せる。しかし、過去の自分の抜き難い暗い衝動を忘却して浅薄な一時の夢と捉えようとする大人になった語り手のこのような姿勢は、語りそのものによって覆されている。

Truly it was impossible to dissociate her presence from all those wretched hankerings after money and gentility that had disturbed my boyhood—from all those ill-regulated aspirations that had

first made me ashamed of home and Joe—from all those visions that had raised her face in the glowing fire, struck it out of the iron on the anvil, extracted it from the darkness of night to look in at the wooden window of the forge and flit away. In a word, it was impossible for me to separate her, in the past or in the present, from the innermost life of my life. (第29章)

ここには、紳士になる迷夢の克服とか精神的成長などという図式を拒否する、破壊的、非合理的な情熱のうちに自己の存在の条件を見る語り手ピップの抑えることの出来ない自己認識の衝動がある。ミス・ハヴィッシュムから、自分がかって騙した恋人に対してそうしたように全てを捧げて「あの娘を愛しておやり！」と呪いをかけられたピップの反応には、確かに、語り手ピップの意図など破壊してしまうような、この作品における非合理的な情熱の中心性が感じられる。²⁰⁾ 若いピップは「私には心がないの。」と警告するエステラの言葉の真実、彼女を恋する気持の不条理を知りつつも「哀れな迷路」に留まり、ミス・ハヴィッシュムの呪いを憑かれたように繰り返し、我が身に引き受ける。それは、無情の美女の虜としての自己の再確認の叫びであり、精神的な死を伴う迷妄として過去の夢を位置付けようとする語り手の意図を超えた、若いピップの真実の顕現となっている。

Far into the night, Miss Havisham's words, 'Love her, love her, love her!' sounded in my ears. I adapted them for my own repetition, and said to my pillow, 'I love her, I love her, I love her!' hundreds of times. Then, a burst of gratitude came upon me, that she should be destined for me, once the blacksmith's boy. (第29章)

III

最終的に自分とエステラを結婚させるのが「恩人」ミス・ハヴィッシュムの意志だという幸福な確信を持ち、ロンドンで念願の紳士としての教育を受けるピップではあるが、その生活は依然として不安に脅かされている。勿論、恩人の正体について、従って、その意図について彼が完全に誤解している以上、その幻想に基づく生活の危うさは必然であるし、何もせず社交と教養だけという紳士理念自体の空虚さという社会的理由も挙げられよう。しかし、

その事実を深く知りようのない若いピップの立場に即して見るならば、この不安は、過去の抑圧に起因する、紳士としての自己の基盤の脆弱さから生ずるものと考えべきであろう。

紳士ピップの生活において抑圧されている過去とは、言うまでもなく、一つにはジョーやビディと過ごした村での生活であり、更には、幼い日の囚人との関わりである。前者の抑圧はジョーを遠ざけようとするピップの「忘恩」として語り手が鋭く指摘し、批判しているものであり、それは、既に見恩と来たような語り手ピップによる若いピップの俗物性批判、更には、その物語の教訓化の企ての全面的な展開の場となっている。

例えば、サチス邸訪問に当たって結局ジョーの所には泊まろうとしない若い自分の心理を回想するコメント（第28章）に端的に見られるように、それは、村の世界と距離を置こうとする若いピップの葛藤の全てを「自己欺瞞」と切って捨てる語り手ピップの姿勢の中に組み込まれている。このような村の生活の記憶の抑圧に対する批判は、結局、中産階級の上昇志向に伴う俗物性に若い頃の自己の憧れ、葛藤を帰着させようとするものであり、社会的リズムの尺度による自己批判であって、究極的には「成長した」現在の語り手の自己満足にもつながりかねないものである。このような構造は、「人間性の悪い一面だよ。」とピップが誠実なビディを繰り返して非難する二人の会話（第19章、第35章）を記す、過去の自分の俗物性を殊更際立たせるような粗野と言う外無い語り口にも見て取ることが出来る。²⁵⁾ 過去の抑圧に対する語り手ピップの批判は、この場合、語り手自身の過去の抑圧をも明るみに出している。若いピップが直面しているのは「忘恩」などという道徳的問題ではなく、自らの生きる文脈の不在という存在論的な問題なのである。若いピップに付きまとう恒常的な惨めさの根底にあるのは、眼前には正体不明の恩人次第という不透明な未来が広がり、背後には紳士の身分を危うくする過激な自去しか見出だせないという自分の置かれた状況の認識であり、この不安な自意識は、中産階級道徳を持ち出す語り手の手を擦り抜ける。俗物化批判は、語り手ピップにとって、自らの直面する現実の問題を回避する手段として機能している。

囚人との関わりの記憶に対するピップの反応、そしてそれを伝える語り手は、このような教訓化のプロセスに直接組み込まれてはいないため、はるかに精妙であり、過去の抑圧がもたらす存在の不安を読者に印象付けるものとなっている。墓地で出会った囚人から金を言付かって来た見知らぬ男の出

現、囚人の足枷による姉の殴打事件など、「野卑で下等」(第10章)な囚人の世界との関わりから生ずる罪悪感は、村に居た頃からピップに付きまとい続けた。希望に胸をふくらませる彼をロンドンで待ち受けるのが後見人の弁護士 Jagers の事務所を取り囲む Smithfield の屠殺場と Newgate 監獄であったという事実は、犯罪の世界との関わりからの脱出の不可能を暗示している。紳士の世界の美しい住人エステラとは相容れない「監獄や犯罪の汚れ」に自分が取り憑かれていることはピップ自身も自覚している(第32章)。サチス邸訪問のため村へ向かうピップの馬車に先の見知らぬ男が囚人として乗り合わせるという出来事は、この否定された過去の復活に脅かされる彼の根源的な不安を見事に示している。

In my fancy, I saw the boat with its convict crew waiting for them at the slime-washed stairs,—again heard the gruff ‘Give way, you!’ like an order to dogs—again saw the wicked Noah’s Ark lying out on the black water.

I could not have said what I was afraid of, for my fear was altogether undefined and vague, but there was great fear upon me. As I walked on to the hotel, I felt that a dread, much exceeding the mere apprehension of a painful or disagreeable recognition, made me tremble. I am confident that it took no distinctness of shape, and that it was the revival for a few minutes of the terror of childhood. (第28章)

囚人のための「盗み」に始まる犯罪の世界との親近性は、幼いピップにとって、存在の不安を集約するものであった。生まれて来たこと自体が犯罪扱いされる環境にあって、囚人マグウィッチを呑み込んだ監獄船はピップの危うい自己をも呑み込みかねない闇の怪物であったのである。囚人との関わりはジョーとの関係以上に紳士の身分とは相容れない過去であるが、この場面におけるピップの不安の深刻さは、囚人に正体を見破られて紳士としての体面に傷が付くという次元を超えて、抑圧された過去による紳士としての自己そのものの解体の危機を暗示している。

紳士としてのピップの自己の解体をもたらすのは、中産階級社会からは人間としての存在を認められない流刑囚マグウィッチの恩人としての登場であ

る。幼いピップに示された同情に対する感謝だけでなく、「ロンドン紳士」を所有することで世間を見返すという自尊心の動機から彼を紳士にしたこの囚人の出現は、紳士ピップの自己を崩壊させ、最終的に彼に「精神的再生」をもたらすことになる。この抑圧された過去の亡霊は、その生命の危険を通してピップの心を動かし、もう一つの否定された過去であるジョーに対する理解を可能にする。ピップに自己の再統合をもたらすべく、現在の生活のうちに秘められている過去の闇を再認識させるのがこの囚人の役割なのである。ピップが彼ゆえに故郷の沼地に誘い出されて死の危機に直面し、これまでの一生を再体験したり（第53章）、或るいは、「故郷の沼地に似た」テムズ川下流で、国外脱出を図るマグウィッチと阻止しようとする元囚人 Compeyson との二人が格闘、水没し、昔クリスマスの夜幼いピップが沼地で目撃した過去の光景を再現して見せたりすること（第54章）は、その一環と考えることが出来る。

自分がミス・ハヴィシャムの男性に対する復讐や遺産狙いの親族を苦しめるための道具に過ぎず、加えて、紳士を所有するという囚人の夢に組み込まれた単なる傀儡であったことを知らされたピップは、恩人マグウィッチに対して誠実を守り、裁判の場面（第56章）に示されている通り、彼のために紳士の体面と決別さえするものの、未整理の過去の幻影の前に無力であり、その混沌の中に呑み込まれる。マグウィッチの病死後一人残されたピップは、他者から与えられた役割の消失の中で、新たな主体性を持った自己の再構築という課題に直面する。熱病に罹った彼を襲う悪夢は、そのアイデンティティの混乱を色濃く反映している。

...that I confounded impossible existences with my own identity; that I was a brick in the house wall, and yet entreating to be released from the giddy place where the builders had set me; that I was a steel beam of a vast engine, clashing and whirling over a gulf, and yet that I implored in my own person to have the engine stopped, and my part in it hammered off; that I passed through these phases of disease, I know of my own remembrance, and did in some sort know at the time. (第57章)

マグウィッチの帰国、国外脱出計画、ミス・ハヴィシャムの焼死、オーリックの襲撃など、彼の受けた trauma を再現する幻覚に引き続くこの悪夢

は、紳士の世界に憧れた少年の日以来のピップの精神的混迷の歳月を、19世紀英国社会全体の上昇志向の渦——great expectations の夢——に巻き込まれた人間性喪失の過程として集約するものである。若いピップの物語は、過去のうちにある本来の自己を否定して、見当違いの紳士の身分を求めた自己喪失の過程として捉えられている。本物と偽者二人の恩人の計画の一部として翻弄された彼の悪夢からの脱出と自己回復への切望の表現として実に鮮やかな一節ではあるが、²⁶⁾ 目の眩む高みから下ろされた時、ピップに帰るべき過去、戻るべき自己が本当に存在するのかという疑問が残る。

IV

紳士としての生活の破産と自己の解体という危機からの救いとしてピップを訪れるのがジョーである。「忘恩」を恥じるピップを「いつだって友達じゃないか。」と慰めるこの「心優しいキリスト教徒」は、彼にとって、何があっても変わらない永遠の価値基準という夢の体現者となっている。心身共に空白と化したピップの看病に献身するジョーは、ピップにとって一切を包容する父性であり、大いなる保護者の役割を果たす。

...and I fancied I was little Pip again.

For, the tenderness of Joe was so beautifully proportioned to my need, that I was like a child in his hands. He would sit and talk to me in the old confidence, and with the old simplicity, and in the old unassertive protecting way, so that I would half believe that all my life since the days of the old kitchen was one of the mental troubles of the fever that was gone. (第57章)

ジョーと過ごした子供時代以降に起こったことを全て「熱に浮かされた錯乱」と信じたいというこのような願望は、「許された子供のように」悔悟の心でビディに求婚し、今後の生き方の決定さえその母性的存在に委ねようとする彼の決心と同根のものである。自己の探求に挫折したピップは、他者の道徳的權威によって導かれ庇護される子供時代に救いを求める。しかし、それは、現実には存在しなかったし存在するはずもない、不安や危険の要素が排除された、溢れる愛に包まれたお伽噺的過去なのである。

確かに、長年の「放浪生活」を終えてビディを「導きの天使」として家庭

生活を送るといふピップの夢は挫折に終わっている。しかし、このことは、存在しなかった過去に道徳的な支柱を求める彼の希望の終焉を意味するものではないし、ジョーがビディと築くヴィクトリア朝家庭という道徳的基盤から彼の離脱を意味する訳でもない。²⁷⁾ 純朴な鍛冶屋夫婦のもとに生まれて来る未来の世代に自己のやり直しの夢を託すピップは、分を守り、一切の夢に心を煩わされない彼らの価値体系の一部としての自己消失願望を表明している。村の世界の限界は忘却され、不安な感受性ゆえの彼の自己探求の物語は家庭の神話のうちに葬り去られ、単に克服されるべき過去としての位置付けしか与えられない。「二人の善天使」²⁸⁾ に対するピップの徹底した悔悟の台詞は、その直前の、「忘恩」を責める「おしゃべりロバ」パンプルチュックの押し付けがましい口調を奇妙に連想させる。若いピップの真情の吐露と素直に受け止めるべきなのかもしれないが、過去の自己の生活を断罪し、許しを求めるその口上は、過去の整理と決別を求める現在の語り手自身のものと聞こえるのである。「もっと言わなくてはならない。」と感じているのは、実は、語り手自身なのではないか。

‘But I must say more. Dear Joe, I hope you will have children to love, and that some little fellow will sit in this chimney corner of a winter night, who may remind you of another little fellow gone out of it for ever. Don't tell him, Joe, that I was thankless; don't tell him, Biddy, that I was ungenerous and unjust; only tell him that I honoured you both, because you were both so good and true, and that, as your child, I said it would be natural to him to grow up a much better man than I did.’ (第58章)

紳士としての生活に秘められた過去の抑圧を克服して自己の再統合へと至る過程そのものの持つ一定の説得力は否定出来ない。しかし、最終的には、この再統合は、美化された過去、存在しなかった過去への退行願望に終わっている。そして、不幸にして、語り手ピップは必ずしもそのことを理解していないと思われる。語りの対象としての自己との距離が消失してゆくにつれて浮かび上がるのは、結局中産階級道徳を受容し、無力な他者への敬愛に生きる現在の語り手ピップの姿なのである。友人 Herbert の Clarriker 商会に入社して東洋で生活する彼の生活ぶりは、James M. Brown の指摘する通り、「伝統的な中産階級の徳目のオンパレード」²⁹⁾ となっている。紳士と

しての教育を受けた以上鍛冶場には戻れないものの、精神的には何ら変わりなくブルジョア社会に再統合された現在の語り手ピップの姿がそこにある。

Many a year went round, before I was a partner in the House; but, I lived happily with Herbert and his wife, and lived frugally, and paid my debts, and maintained a constant correspondence with Bidly and Joe....We were not in a grand way of business, but we had a good name, and worked for our profits, and did very well.

(第58章)

国外に出たとは言え、エステラに対する今や純粹に個人的なものとなった感情以外の点においては、このピップを亡命者と見るのは困難ではないだろうか。

11年間の東洋での生活の後故郷を訪れた彼は、失われた自分の代わりとなる小さなピップをジョーの鍛冶場に見出だす。生きられなかった鍛冶屋としての生活をこの自分の生まれ変わりの少年に託すピップは、荒廃したサチス邸でエステラと再会する。現行の結末では二人の結婚の暗示が見られるが、そのことは、「哀れな夢」の終わりをビディに告げる彼の言葉と必ずしも矛盾するものではない。エステラはもはや以前の彼女ではないのだ。残酷な夫との惨めな辛い生活を通してピップの愛の価値を知ったという彼女の悔悟と告白は、かつてのピップの愛の本質であった非合理的な暗い衝動を覆い隠し、感傷的に聖化するものである。「哀れな夢」は克服したというピップの告白は、教養小説としての解釈者からは「ピップの成熟した自己認識に対する究極的な証明」と呼ばれているが、³⁰⁾ 精神的に成長したとされるエステラと結ばれる「成長した」ピップという図式の背後には、語り手ピップの同様の自己満足的な姿勢が覗いているのではないか。

勤儉力行が自然と立身出世につながるという幸福な世界観によって、正直なジョーの価値体系と上昇志向のヴィクトリア朝中産階級の一員としての生活とを両立させている語り手には、不安な自意識と向き合う若いピップの物語は、もはや捕らえ難い、他者の物語であった。通俗道徳に身を寄せ、成長として若いピップの物語を呈示しようとする語り手の操作にもかかわらず、実際に作品から立ち現れるのは、挫折に終わった自己探求の物語となっている。過去のピップの本当の姿は語り手の操作を超えてテキストに示されているが、語り手ピップにとっては自己の探求は終わりを告げ、「成熟した」大

人としての生活の中で、若い日の自己の幻影は時の彼方に失われたのである。

註

- 1) J. H. Buckley, *Season of Youth: The Bildungsroman from Dickens to Golding* (Cambridge: Harvard University Press, 1974), pp. 17-18.
- 2) Buckley, pp. 43-62.
- 3) F. R. Leavis and Q. D. Leavis, *Dickens the Novelist* (London: Chatto & Windus, 1973), pp. 277-331.
- 4) Buckley, p. 53.
- 5) Leavis, p. 287; p. 331
- 6) Lawrence Frank, *Charles Dickens and the Romantic Self* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1984), p. 153.
- 7) 海老根宏「ピップの夢——*Great Expectations* の一解釈——」『英国小説研究』第14冊（篠崎書林, 1984.12）, p. 53.
- 8) *Great Expectations*, ed. Angus Calder (Penguin Books, 1965). 以下、引用はこの版による。
- 9) Robin Gilmour, *The Idea of the Gentleman in the Victorian Novel* (London: George Allen & Unwin, 1981), p. 132.
- 10) Cf. G. Robert Stange, "Expectations Well Lost: Dickens's Fable for His Time" in *The Nineteenth-Century Novel: Critical Essays and Documents*, ed. Arnold Kettle (London: Heinemann Educational Books, 1972), p. 134; originally in *College English* XVI (1954-55).
- 11) Cf. Leavis, pp. 295-96.
- 12) A. L. French, "Beating and Cringing: *Great Expectations*," *Essays in Criticism* XXIV (1974), 150-51.
- 13) 海老根, p. 60.
- 14) Cf. Eiichi Hara, "Stories Present and Absent in *Great Expectations*," *English Literary History*, 53, No. 3 (1986), 601.
- 15) Buckley, p. 56.
- 16) Stange, p. 132.
- 17) Leavis, p. 299.
- 18) J. Hillis Miller, *Charles Dickens: The World of His Novels* (Cambridge: Harvard University Press, 1958), p. 266.
- 19) Cf. Gilmour, p. 135.
- 20) Gilmour, p. 133.

- 21) *Ibid.*
- 22) 海老根, p. 75.
- 23) Frank, pp. 158-59.
- 24) Cf. Hara, 610.
- 25) Cf. French, 162-63.
- 26) Cf. Frank, p. 180.
- 27) Cf. 川本静子『イギリス教養小説の系譜——「紳士」から「芸術家」へ——』
(研究社, 1973), pp. 97-98.
- 28) 川本, p. 90.
- 29) James M. Brown, *Dickens: Novelist in the Market-Place* (London: Macmil-
lan, 1982), pp. 140-41.
- 30) Buckley, p. 60.